

氏 名（本籍）	ほり 堀	かわ 川	えつ 悦	お 夫
学位の種類	博 士（医 学）			
学位記番号	医 第 3 3 7 3 号			
学位授与年月日	平 成 17 年 9 月 14 日			
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 2 項該当			
最 終 学 歴	平 成 2 年 3 月 愛知学院大学大学院文学研究科 単位修得退学			
学位論文題目	アルツハイマー病患者の転倒リスクに関する追跡的研究			

(主 査)

論文審査委員	教授 佐々木	毅	教授 永 富 良 一
	教授 曾 良 一 郎		

論文内容要旨

背景

アルツハイマー病患者において転倒は多く発生しており，転倒のリスクファクターを同定し，予防対策を講じることはアルツハイマー病患者の QOL（Quality of Life：生活の質）を維持する上で重要である。

目的

アルツハイマー病患者の転倒について前向き臨床研究を行い，転倒のリスクファクターを抽出する。

方法

対象者：物忘れ外来を受診した軽度から中度のアルツハイマー病患者 124 名を 1 年間にわたり追跡した。その平均年齢は 74.1 歳，標準偏差 6.1 歳，年齢幅 62 歳から 88 歳であった。

手続き：追跡研究のベースラインとして，身体動揺，認知機能，抗精神病薬の服用，加えて頭部 MRI により脳室周囲白質病変および深部白質病変の重症度，脳梗塞や無症候性脳梗塞の有無を評価した。

結果

ベースラインとしてデータが得られた 124 名の中で 1 年間の追跡が可能であった患者は 104 名であり追跡率は 84%であった。転倒が生じた患者は 44 名（42.3%）であった。年齢，性別，認知機能，脳室周囲白質病変および深部白質病変の重症度や無症候性脳梗塞の有無を説明変数としたロジスティック回帰分析を行ったところ，転倒のリスクファクターとして脳室周囲白質病変（オッズ比 8.7，95%信頼区間 1.5-51.8），抗精神病薬の服用（オッズ比 3.5，95%信頼区間 1.2-10.5）が有意であった。

考察

この結果は脳室周囲白質病変と抗精神病薬の服用が軽度から中度のアルツハイマー病患者の転倒に関連していることを示唆している。アルツハイマー病患者の転倒を減らすには，白質病変の原因の 1 つと考えられる脳虚血防止のためのリスク管理を行うこと，そしてアルツハイマー病患者の行動や精神症状の治療としての抗精神病薬の処方が必要最低限にすることが推奨される。

キーワード

アルツハイマー病, 転倒, 白質病変, 抗精神病薬, 無症候性脳梗塞

審査結果の要旨

アルツハイマー病患者において転倒は多く発生しており、転倒の危険因子を同定し、予防対策をこころがけることはアルツハイマー病患者のQOL（Quality of Life：生活の質）を維持する上で重要である。このため、本研究では転倒の危険因子を見出すためにアルツハイマー病患者の転倒について前向き臨床研究を行った。

研究方法としては、物忘れ外来を受診した軽症から中度のアルツハイマー病患者124名を1年間にわたり追跡した。その平均年齢は74.1歳、標準偏差6.1歳、年齢幅62歳から88歳であった。追跡調査のベースラインとして、身体動揺、認知機能、抗精神病薬の服用、加えて頭部MRIに脳室周囲白質病変および深部白質病変の重症度、脳梗塞や無症候性脳梗塞の有無を評価した。その結果、ベースラインとしてデータが得られた124名の中で1年間の追跡が可能であった患者は104名であり追跡率は84%であった。転倒が生じた患者は44名（42.3%）であった。年齢、性別、認知機能、脳室周囲白質病変の重症度によって調整したロジスティック回帰分析を行ったところ、転倒のリスク要因として脳室周囲白質病変（オッズ比8.7、95%信頼区間1.5-51.8）、抗精神病薬の服用（オッズ比3.5、95%信頼区間1.2-10.5）が有意であった。

本研究により脳室周囲白質病変と抗精神病薬の服用が軽度から中度のアルツハイマー病患者の転倒に関連していることが示唆された。これは新知見とされ、この知見よりアルツハイマー病患者の転倒を減らすには、脳虚血の総合的リスク管理、そしてアルツハイマー病患者の行動や精神に関する周辺症状の治療のために用いられる抗精神病薬の処方が必要最低限にすることが推奨された。臨床的に有意義な研究であり、学位に相応するとみなされる。

よって、本論文は博士（医学）の学位論文として合格と認める。